

パーキンソン病の話:いろいろ

足指の変形



線条体の足指(未治療時)

親指の伸展と、
他の指の屈曲



ドパミン低下時の屈曲

病気初期、治療中に 見られる場合

前回お話しした手の指の変形に続いて、今回は足の指について解説します。足指の変形は手指同様にパーキンソン病以外の病気にも生じますが、ここではパーキンソン病においてみられるものに限定します。

時に足の指の変形は病気の初発

に見られることがあります。手でも見られることがあります。 「線条体の足」と呼ばれて有名なものです。通常、足の指が屈曲したり伸展位を示すため(写真)、歩行時に痛みが生じて障害を来すことがあります。しかし、この症状だけではパーキンソン病との診断は困難です。

病気の治療中に見られる場合は、脳内のドパミンが低下した時

に見られます。この症状は基本的に「線条体の足」の症状と同じです。

早朝や日中に 見られる場合

早朝、起床時のドパミンが極端に低下した場合にしばしば見られます。多くはある程度、長期間ドパを服薬した場合に見られます。両足指、または片足指に見られませんが、時に痛みを伴うことがあります。

早朝でなくても、日中ドパの脳内濃度が低下すると、同様の足指の症状が出る場合があります。これは運動症状の日内変動が見られる患者で発現することがあります。

が、全員ではありません。

原因はドパミンの低下 ドパを服用して補給

足指の変形は脳内ドパミンの減少が引き起こすため、筋肉がこわばって痛むジストニアという症状だと理解されます。原因は脳内ドパミンの低下ですので、ドパミンを補給するドパを飲めば消失しますが、乱用は好ましくありません。

寝る前に、効果持続が長いドパミンアゴニストや、クロナゼパン(ランドセン)というてんかんの薬を飲むことが有効な場合があります。症状の日内変動があればこれを改善することが大切です。